
短編 5

三木拓矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編5

【Nコード】

N7738N

【作者名】

三木拓矢

【あらすじ】

死。

それはどういうものなのか考えてみる。

(前書き)

先に注意

この作品で作者が書いたことは個人の考えです。
そこをふまえてお読みいただければ幸いです。

死。

それはどういうものなのか考えてみる。

生きるの対義語。

亡くなる、逝くと同義語……………

人は自分の人生において死という意味について頭を抱える、とま
ではいけないもののふと考えてみることはあるのではないだろうか？
人の行き着く最後の疑問。それが死。

地獄だの天国だの幽霊だの死についての答えを探そうとした結果
俗物的に終わる。

なんの意味も持たない。

なんの理由もいらない。

人は生きて、ただ死ぬだけである。

なぜ生き物は生に執着して死を望まないのか。

なぜ、死にたくなのか。

幽霊などを信じる人は死んだ後も生き物はどうにかなると考えて
いる人であろう。

それなのになぜ死にたくないのか。

死んだ後も続きがあるならば別に死することも対してどうでもい
いのではないか。

命を粗末にするなというが、別に死んだから命が無くなるわけ
はないだろうと私は考える。

ただ心臓が止まっただけではないか。

それとも命とは心臓のことなのだろうか。

なぜ心臓が止まったからそこで自分は終わりだと言えようか。

死んだらそれまでだとなぜ言えようか。

人という生き物は死というモノを少し怖がって考えているのではないだろうか。

しかし、死ということは親から教わるものでもないし、学校から説明されることでもない。

誰にも教わっていないのに人はいつの間にか死を恐れる。

なぜだろうか？

私が思うにそれは人が死を怖がるからであるからではないか？

死を恐ろしいものと考え。それがどんどんと繰り返し伝わってゆく。

そんな悪循環のもとに死の概念は成り立っているのではないだろうか。

さて、今回はここまでにしておじい。

(後書き)

これは本気で考えて書いたら絶対に終わらない気がしたので
主規制の強制カットしました。

続きはまあ、またふと思いついた時にでも

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7738n/>

短編 5

2010年10月9日19時23分発行